

# 青年期の自己愛的脆弱性と 友人間のソーシャル・サポートの関連

岩崎 眞和・五十嵐透子

## 要 約

青年期に高まりやすい“自己愛傾向”について、国内では周囲からの評価や反応に対して過度に敏感で注目を回避しようとする“過敏型自己愛傾向”への関心が高まっている。特に自己心理学を確立したH.Kohutによる自己愛の発達理論を基に提唱された“自己愛的脆弱性”（上地・宮下，2001）に関する研究が蓄積されている。そこで本研究では、青年期の自己愛的脆弱性の状態を類型化して友人関係でのソーシャル・サポートの授受量および感情体験との関連を検証した。質問紙調査によって得られた専門学校生，大学生，大学院生計446名（有効回答率90.8%；男性206名，女性240名）の分析結果から，友人への“提供サポート”と“サポートの授受量”では“脆弱群”が他の群よりも有意に高かった。また友人関係での“満足感”は“非脆弱群”と“潜在的特権意識低群”が他の2群よりも有意に高く，“苦痛”は概ねそれとは反対の傾向を示した。本研究により，青年期におけるセルフ・アイデンティティの確立状態と友人間のソーシャル・サポートの相互性の関連や，自己愛的脆弱性に関するサブタイプの心理的な特徴の理解の一助となる知見が得られた。

キーワード：自己愛的脆弱性，ソーシャル・サポート，友人関係，青年期

## 1. 問 題

ライフサイクルにおいて，青年期は自意識の高まりと両親からの自律および自立に向けた葛藤のなかで自己愛的になりやすい発達段階とされる（小塩・川崎，2011）。こうした青年期特有の“自己愛（narcissism）”の高まりは，青年期の前期から中期にかけては自己の過大評価や権威への反抗という形となって現れ，青年期後期になるにつれて自らが理想化した対象への同一化や自我理想，そしてアイデンティティの確立へと発達的に変化していくとされる（上地・宮下，2004；小塩・川崎，2011）。したがって，青年期の一時的な自己愛傾向の高まりは，対人関係の葛藤を高める面もあると同時に，セルフ・アイデンティティの発達において促進的に作用したり，大学生活などへの適応に際して不可欠でポジティブな影響をおよぼす側面もある（南雲・岩崎・五十嵐，2018）。

自己愛傾向に関しては，そのさまざまな表現型の差異から自己中心性や誇大性，自己顕示性などが前景となる“周囲を気につけないナルシスト（oblivious narcissist）”（以下，誇大型自己愛）と，周囲からの反応への過敏さや傷つきやすさ，内気さ，恥の体験のしや

すきなどを前景とする“周囲を過剰に気にするナルシスト (hypervigilant narcissist)” (以下、過敏型自己愛) の2タイプに関する研究が進展してきた (Gabbard, 1994/1997)。国内での自己愛傾向に関する代表的な心理学研究として、前者の“誇大型自己愛傾向”の把握に適した“自己愛人格目録 (narcissistic personality inventory; Raskin & Terry, 1988)”の項目を翻訳および整理して作成された“自己愛人格目録短縮版 (narcissistic personality inventory-short version; 小塩, 1998)” (以下、NPI-Sと略記) を用いた小塩 (2004) による一連の研究が挙げられる。NPI-Sの開発以降、本尺度の3下位因子 (“優越・有能感” “自己主張性” “注目・賞賛欲求”) を用いた自己愛傾向の“2成分モデル” (小塩, 2004) に基づく研究をはじめとして、現在に至るまで青年期の自己愛に関する実証的研究は大きく進展した (小塩・川崎, 2011)。

一方、国内でのとりわけ青年期の心理臨床においては、前者に比して後者の“過敏型自己愛傾向”の強さを背景に登校困難やアパシーといった不適応状態に陥っているケースの多さが指摘されてきた (上地・宮下, 2004; 神谷・岡本, 2010; 小塩・川崎, 2011; 吉井, 2007)。こうした“過敏型自己愛”に関する体系的な理解と臨床心理学的援助の枠組みを提唱したHeinz Kohut (1913-1981) による自己心理学を基盤とし、自らの緊張や不安を緩和する能力に着目して提起された概念に“自己愛的脆弱性 (narcissistic vulnerability)” (上地・宮下, 2005) がある。自己愛的脆弱性は、自己愛的欲求の表出に伴う不安や他者の反応による傷つきなどを緩和し、心理的安定を保つ力の脆弱さと定義され、上地・宮下 (2005, 2009a) による尺度化がなされて以降、さまざまな観点から研究が蓄積されている (目久保・百瀬・越中, 2017; 小塩・川崎, 2011)。そのなかでも下位因子間の関連の検討から、他の下位因子との関連が希薄な“目的感の希薄さ”を除外した4因子構造の“自己愛的脆弱性尺度短縮版 (narcissistic vulnerability scale-short version; 上地・宮下, 2009b)” (以下、NVS-Sと略記) が開発されるとともに、近年では調査対象を自己愛的脆弱性の観点から類型的に捉え、各サブタイプの心理的特徴を明らかにする研究も報告されている (神谷・岡本, 2012, 2014; 神谷・岡本・高野, 2013; 神谷・高野, 2013)。神谷他によれば、自己愛的脆弱性が典型的に高い“脆弱群”とその対極の“非脆弱群”の他、“自己緩和不全群”“自己顕示抑制群”を加えた計4つのサブタイプが抽出されている。しかし、過敏型自己愛傾向に特化した類型論的アプローチによる研究は十分に蓄積されておらず、そのサブタイプの抽出も探索的段階である。以上のように、“誇大型自己愛傾向”と“過敏型自己愛傾向”の2タイプの測定が可能となったが、特に青年期の自己の発達に関し、相互独立的自己観に比して相互協調的自己観が優位とされる日本人においては、後者の自己愛傾向に焦点化し、ポジティブおよびネガティブな影響を明らかにすることの臨床的意義は高いと思われる。

青年期の過敏型自己愛傾向に焦点化した研究において、現代青年の自己愛的脆弱性と精神的健康を考える上で重要な“友人関係”に関する諸要因との関連を検証した研究では、NVS-Sの“自己顕示抑制”が“ふれあい恐怖傾向”や“対人恐怖傾向”を高めやすく (伊藤・村瀬・金井, 2011)、友人との間では“自己隠蔽”をしながらの関係構築を行いやすいことが報告されている (上地・宮下, 2009a)。他にも、神谷・高野 (2013) は大学生の自己愛的脆弱性と重要な対象との関係のなかで生じる“自己対象体験”との関連を検証し、

“自己緩和不全”と“鏡映自己対象体験”や“双子自己対象体験”との間に弱い正の関連、“自己顕示抑制”“承認・賞賛過敏性”と“理想化自己対象体験”との間に弱い正の関連がそれぞれみられることを報告している。これらは自己愛的脆弱性と大学生活や友人関係での適応状態や精神的健康との関連の理解に寄与する知見であり、たとえば中嶋・岡本(2014)も自己愛的脆弱性とストレス・コーピングおよびストレス反応との関連を報告しているが、その他の関連要因については十分に解明されていない。

## 2. 目的

本研究では、青年期を対象に自己愛的脆弱性と彼らの精神的健康を考える上で重要な“友人関係”におけるソーシャル・サポートの授受量および感情体験の関連の検証を目的とする。その際に、神谷他(2013)にならいNVS-S(上地・宮下, 2009b)の全下位因子を用いたクラスタ分析を行って対象を自己愛的脆弱性の状態から類型化し、各サブタイプの心理的特徴を明らかにする。自己愛的脆弱性が高い状態では、友人関係におけるソーシャル・サポートの授受が円滑に行われにくく、衡平感を抱きにくいサポートの授受関係を体験しやすいと考えられる。さらに、それに伴って友人関係でも“満足感”や“信頼感”よりも自分が十分に理解されていないといったネガティブな感情を抱きやすく、自己愛的脆弱性と友人関係での“苦痛”には正の関連が推測される。

## 3. 方法

### (1) 調査概要

2012年7月中旬から同年8月下旬にかけて、甲信越地方の専門学校2校(1-3年生)とA大学(学部1-4年生と同大学院1・2年生)において倫理面で十分な配慮の上、講義終了後の集合調査形式と個別配布個別回収形式による無記名式の調査を実施した。

調査協力者に対して、調査協力は自由意思であり回答を中断して途中退室できることや、回答結果に対する個人情報の保護と本研究のみでの使用を口頭により説明した。その説明の後、退室や調査協力への辞退の申し出がなかった対象に調査を実施し、計491名から回答を得た。

### (2) 分析対象

年齢の外れ値や、後述する質問紙への記入に不備のみられた回答を除く446名(有効回答率90.8%;男性206名,女性240名)を分析対象とした。内訳は専門学校生103名,大学生208名,大学院生135名であり、平均年齢は21.19歳(SD=2.20, range:18-27歳)であった。

### (3) 調査材料

質問紙は、性別と年齢についての項目を記載したフェイスシートと、以下の尺度から構成された。

#### ①自己愛的脆弱性尺度短縮版(NVS-S)

自己顕示を恥じて抑制する“自己顕示抑制”,潜在的に自分への特別な配慮や気遣いを求

める“潜在的特権意識”，他者からの承認や賞賛への過度な敏感さを表す“承認・賞賛過敏性”，不安や抑うつ感情を自分で緩和する力の脆弱さを表す“自己緩和不全”の4因子20項目から構成され，信頼性 ( $\alpha = .79 - .85$ ) と妥当性が検証されている上池・宮下 (2009b) のNVS-Sを用いた。各項目の体験頻度について，「1：まったくない」から「5：よくある」の5件法で訊ねた。

#### ②友人からのサポート受領尺度

友人間で日常的にやり取りされる慰めや励ましなどの情緒的サポート行動である福岡 (1997) の9項目と，岩崎・五十嵐 (2011) で抽出された友人からの“手段的 (道具的) サポート”を構成する3項目の計12項目 (項目例：「3. 忙しい時，ちょっとした用事を手伝ってくれる」「7. 体調不良で数日間寝ていなくてはならない時，代わりに買い物に行ったり見舞ってくれる」) を用いた。普段からつき合いのある友人から得ているソーシャル・サポートの程度について，「1：してくれない」から「5：非常によくしてくれる」の5件法で訊ねた。

#### ③友人へのサポート提供尺度

先の“友人からのサポート受領尺度”の12項目について，友人へのサポート提供状況のイメージがしやすいように，それぞれ「友人が…な時，～する」と表現を改変して用いた。普段の友人へのサポート提供について，「1：していない」から「5：非常によくしている」の5件法で訊ねた。

#### ④友人関係感情尺度

加藤 (2001) と豊田 (2004) が作成した2つの友人満足感尺度を参考に，友人との関係を好意的にとらえ満足している状態を表す“満足感” (8項目) と，友人との関係に不満や苦痛を感じている状態を表す“苦痛” (4項目) の2因子構造を想定した計12項目の尺度を作成した。各項目について，「1：あてはまらない」から「5：非常にあてはまる」の5件法で訊ねた。

### (4) 分析ソフト

分析には，統計処理ソフト「IBM SPSS Statistics 24 for Windows」を用いた。

## 4. 結果

### (1) NVS-Sと友人関係感情尺度の因子構造と内的一貫性

NVS-Sと友人関係感情尺度の各項目の尺度得点に回答偏向はみられなかったため，両尺度とも全項目について探索的因子分析 (最尤法・Promax回転) を実施した。その結果，スクリー基準や解釈可能性などから前者は原版に基づく4因子構造 (Table 1) が再現され，後者は当初に想定した“満足感”と“苦痛”の2因子構造 (Table 2) が得られた。両分析により得られた計6因子の内的一貫性は， $\alpha = .81 - .90$ と十分に高い値を示した。

### (2) 友人間のソーシャル・サポート授受量

友人からの受領と提供サポートの両尺度の得点に回答偏向はみられなかったため，全項目について主成分分析を行った結果，ともに1因子構造 (累積寄与率；順に56.59%，

Table 1 NVS-Sの探索的因子分析結果（最尤法, Promax回転）

項目	因子負荷量				記述統計量	
	F1	F2	F3	F4	M	SD
<b>F1: 潜在の特権意識 (<math>\alpha = .84</math>)</b>						
9 私は、周囲の人がもっと私の能力を認めてくれたらいいにと思う	.74	.07	-.02	-.10	2.55	1.08
13 他の人が私に接するときの態度が丁寧ではないので、腹が立つことがある	.71	-.04	-.07	.03	2.50	1.05
4 まわりの人に対して「もっと私の発言を尊重してほしい」と思うことがある	.71	.01	.17	-.12	2.85	1.02
17 まわりの人に対して「もっと私の気持ちを考えてほしい」と思うことがある	.71	-.05	.03	.16	2.80	1.01
6 まわりの人々の態度を見ていて、こちらへの配慮が足りないと思うことがある	.68	.02	-.05	.03	2.98	1.06
<b>F2: 自己顕示抑制 (<math>\alpha = .84</math>)</b>						
20 人と話した後に「あんなに自分を出すのではなかった」と後悔することがある	-.08	.89	-.10	.02	3.06	1.22
11 「自分のことを話すぎた」と思っ、自己嫌悪におちいることがある	-.03	.78	.01	.02	3.20	1.18
2 人前で自分のことを話したあとに、話した内容について後悔することがある	.21	.58	.05	-.11	3.12	1.14
19 だれかと話しているときには、自分の話題で時間を取りすぎていると思っ、気にしている	.07	.56	.02	.06	3.07	1.16
8 他の人に自分のことを自慢するような話をしたあとで、後味の悪い感じが残ることがある	-.03	.56	.09	.11	3.70	1.06
<b>F3: 自己緩和不全 (<math>\alpha = .83</math>)</b>						
7 悩みや心配事があるときには、自分の中にとどめておけなくて、すぐだれかに話したくなる	.04	-.01	.81	-.23	3.14	1.20
3 つらいことや苦しいことがあるときには、身近な人にそれを理解してほしいと強く期待する	.03	-.08	.70	.13	3.56	1.09
12 悩んだり落ち込んだりしたときに相談できる人が身近にいないと、私は生きていけないと思う	-.10	.06	.70	.07	3.18	1.27
18 精神的に不安定になっているときには、だれかと話をしないと落ち着くことができない	.04	.03	.61	.03	2.86	1.23
15 不安を感じているときには、だれかから大丈夫だと言ってもらわないと安心できない	-.07	.02	.40	.34	2.80	1.19
<b>F4: 承認・賞賛過敏性 (<math>\alpha = .84</math>)</b>						
16 他の人から批判されると、そのことが長い間ずっと頭にこびりついて離れない	-.04	.01	-.08	.85	3.29	1.17
5 自分の発言や行動が他の人から良く評価されていないと、そのことが気になってしかたがない	.07	.05	.04	.68	3.22	1.18
1 相手が私を避けているように思えると、私は非常に落ち込んでしまう	-.04	.10	.02	.63	3.59	1.18
14 他の人が私の発言や行動に注目してくれないと、自分が無視されているように感じるがある	.33	.07	-.08	.45	2.64	1.07
10 自分の良い所をほめられたり認められたいしないと、自分に自信がもてない	.14	.11	.06	.43	3.17	1.16
因子間相関						
	F1	—	.57	.53	.67	
	F2		—	.46	.72	
	F3			—	.66	
	F4				—	

Table 2 友人関係感情尺度の探索的因子分析結果（最尤法, Promax回転）

項目	因子負荷量		記述統計量	
	F1	F2	M	SD
<b>F1: 満足感 (<math>\alpha = .90</math>)</b>				
8 友人と気持ちが通じ合っていると感じる	.97	-.13	3.66	.98
7 私のことを本当に理解してくれる人がいる	.86	-.12	3.83	1.06
3 私のことを支持してくれる人がいる	.69	-.11	3.72	.89
11 友人といるときには、自分らしくいられる	.61	.21	3.52	1.01
1 友人とのつきあいはうまくいっていると感じる	.55	.24	3.80	.87
10 周囲の人たちに受け入れられていると感じる	.53	.09	3.48	.99
12 友人関係に満足している	.52	.34	3.85	.98
6 友人関係は今のままでいいと思う	.51	.25	3.76	1.05
<b>F2: 苦痛 (<math>\alpha = .81</math>)</b>				
5 今の友人関係は、私が望んでいたものと違っている	.08	-.84	1.98	.97
4 友人とのつきあいが、本当はつらいときがある	.06	-.76	2.47	1.13
9 友人関係は自分にはあわないと思う	.02	-.71	1.97	.95
2 友人といるときは自分の、本当の自分ではない気がする	-.06	-.57	2.33	1.05
因子間相関				
	—	.68		

57.48%) が確認された。その後、“受領サポート” ( $\alpha = .92$ ) と“提供サポート” ( $\alpha = .92$ ) の2因子の加算平均値として“サポート授受量” ( $mean = 3.93, SD = .62$ ) を算出した。“サポート授受量”は、高得点であるほど友人とのソーシャル・サポートのやり取りが円滑に

行われており、友人間での相互性が高い傾向を表している。

### (3) 自己愛的脆弱性と他の諸因子との関連

相関分析により各因子間の関連を検証したところ、“自己緩和不全”が友人間のソーシャル・サポートの授受量と弱い正の関連を、そして“自己緩和不全”を除く自己愛的脆弱性の3つの下位因子がいずれも友人関係における“満足感”と弱い負の関連、“苦痛”と弱い正の関連をそれぞれ示した (Table 3)。

### (4) 自己愛的脆弱性のサブタイプ

神谷他 (2013) にならい自己愛的脆弱性の4下位因子の平均尺度得点を用いたクラスタ分析 (Ward法) を行ったところ、各クラスタの特徴に若干の相違がみられたものの神谷他と同数の計4クラスタが抽出された (Table 4)。第1クラスタと第4クラスタは神谷他と類似の傾向であったため、それぞれ“非脆弱群”“脆弱群”と命名した。第2クラスタは、全下位因子が“非脆弱群”よりも高いが“脆弱群”よりは低いという中間的な位置づけにあるため“中程度脆弱群”と命名した。第3クラスタは、自己愛的脆弱性のなかで潜在的に特別扱いや待遇を求める“潜在的特権意識”のみが“非脆弱群”と同程度に低い点に特徴がみられたため、“潜在的特権意識低群”と命名した。

### (5) 自己愛的脆弱性のサブタイプにおける友人間のサポート授受量と感情体験の特徴

自己愛的脆弱性のサブタイプを独立変数 (4水準)、友人とのソーシャル・サポートの授受量と感情体験を従属変数 (計5因子) とする分散分析を行ったところ、友人への“提

Table 3 自己愛的脆弱性と他の諸因子との相関分析結果

	友人間のソーシャル・サポート			友人関係での感情体験	
	受領	提供	授受量	満足感	苦痛
<b>自己愛的脆弱性</b>					
自己顕示抑制	-.06	-.03	-.05	-.25***	.34***
潜在的特権意識	-.11*	.05	-.03	-.23***	.36***
承認・賞賛過敏性	-.04	.01	-.02	-.28***	.30***
自己緩和不全	.24***	.25***	.27***	.06	.12*

\* $p < .05$ , \*\*\* $p < .001$

Table 4 自己愛的脆弱性の各サブタイプ

	1. 非脆弱群 ( $n=126$ )		2. 中程度脆弱群 ( $n=153$ )		3. 潜在的特権意識低群 ( $n=107$ )		4. 脆弱群 ( $n=60$ )	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
<b>自己愛的脆弱性</b>								
自己顕示抑制	2.41	.59	<u>3.58</u>	.74	3.09	.59	4.32	.52
潜在的特権意識	2.11	.57	<u>3.09</u>	.55	2.34	.46	<u>3.87</u>	.62
承認・賞賛過敏性	2.23	.51	<u>3.64</u>	.62	2.98	.50	<u>4.37</u>	.40
自己緩和不全	2.17	.55	<u>3.43</u>	.63	3.07	.62	4.33	.56

注) 3.00 (たまにある) 以上の平均値と標準偏差に下線を付した。

Table 5 自己愛的脆弱性のサブタイプにおける友人間のソーシャル・サポートと感情体験の特徴

	1. 非脆弱群 (n=126)		2. 中程度脆弱群 (n=153)		3. 潜在的特権意識低群 (n=107)		4. 脆弱群 (n=60)		F (3, 442)	η <sup>2</sup>	多重比較 (Bonferroni法)
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD			
<b>友人間のサポートの授受</b>											
受領サポート	3.88	.72	3.86	.69	4.01	.64	4.03	.67	1.61	.01	
提供サポート	3.87	.71	3.89	.66	3.91	.61	4.15	.58	2.89*	.02	1・2・3<4
サポート授受量	3.88	.66	3.88	.63	3.96	.57	4.09	.55	2.17†	.02	1・2<4
<b>友人関係での感情体験</b>											
満足感	3.82	.73	3.60	.74	3.80	.71	3.53	.84	3.62*	.02	2・4<1・3
苦痛	1.94	.81	2.32	.83	1.95	.64	2.63	.82	15.25***	.09	1・3<2<4

†p<.10, \*p<.05, \*\*\*p<.001

供サポート”と“サポート授受量”(F(3,442)=2.89, p<.05, η<sup>2</sup>=.02; F(3,442)=2.17, p<.10, η<sup>2</sup>=.02)および感情体験の2因子(F(3,442)=3.62, p<.05, η<sup>2</sup>=.02; F(3,442)=15.25, p<.001, η<sup>2</sup>=.09)でそれぞれ要因の主効果が有意あるいは有意傾向であった。

多重比較(Bonferroni法)を行ったところ,“提供サポート”と“サポートの授受量”で“脆弱群”が他の2-3群よりも有意に高かった。また“満足感”では“非脆弱群”と“潜在的特権意識低群”が他の2群よりも有意に高く,“苦痛”では概ねそれと反対の傾向がみられた(Table 5)。

### 5. 考察

本研究では,青年期の自己愛的脆弱性と友人関係でのソーシャル・サポートの授受量および感情体験の関連の検証を行った。その際に,神谷他(2013)と同様にNVS-S(上地・宮下,2009b)の全下位因子を用いたクラスタ分析によって調査対象を自己愛的脆弱性の状態から類型化し,各サブタイプの心理的特徴も併せて検討した。

自己愛的脆弱性の類型化に先立って実施した相関分析では,①NVS-Sの下位因子のうち“自己緩和不全”を除く3因子と友人関係での“苦痛”の体験しやすさおよび“満足感”の得にくさとの有意な関連,②“自己緩和不全”は友人間のソーシャル・サポート授受量と弱い正の関連を示した一方で,友人関係の感情体験とはほとんど関連がないという2つの知見が得られた。伊藤他(2011)が“自己緩和不全”以外の自己愛的脆弱性の下位因子と“ふれあい恐怖”の間に弱いから中程度の正の関連があることを報告しているように,“自己顕示抑制”“潜在的特権意識”“承認・賞賛過敏性”が高い状態では,情緒的で親密な友人関係にまで深まりにくいと考えられる。一方,“自己緩和不全”は神谷・岡本(2014)が指摘したように自己愛的脆弱性の他の3因子と異なり表面的には友人間のサポート授受量を高めながらも,友人関係での満足感を得られにくい可能性が示唆された。②の結果を踏まえると,“自己緩和不全”が高い状態で友人とのサポート授受が行われたとしても,常に潜在的な不安や自己愛の傷つきを抱え,友人からするとその不安を緩和するために利用されているように体験されている可能性も考えられ,結果として友人同士の相互信頼や受容感に結びつきにくいことが推測される。

自己愛的脆弱性の類型化については,神谷・高野(2013)と同数の4クラスタが得られ,

自己愛的脆弱性が低い“非脆弱群”と自己愛的脆弱性が高い“脆弱群”の2クラスは神谷・高野と類似の結果であった。神谷・高野の“脆弱群”は全下位因子の平均値が3-4点に収まっていたことから“中程度脆弱群”に近く、本研究では自己愛的脆弱性が低い群から高い群までの3クラスが得られ、自己愛的脆弱性が特に高い“脆弱群”が抽出できた点に違いがあった。加えて、神谷・高野では抽出されなかった特徴的な群として、自己愛的脆弱性に基づくと思われる体験が「たまにある(3点)」状態でありながら、自分への特別な配慮や気遣いを求める“潜在的特権意識”のみが“非脆弱群”と同程度に低い“潜在的特権意識低群”の存在が挙げられる。“非脆弱群”より幾分対人関係や自己愛の傷つきに対する過敏さが高い“潜在的特権意識低群”は、神谷他(2013)で抽出された“自己緩和不全群”や“自己顕示抑制群”とは異なった心理的特徴を有しており、彼らに適した臨床心理学的支援に向けた更なる検討が必要と考えられる。

自己愛的脆弱性の類型化による分散分析の結果、①“脆弱群”は他の群に比べて友人間でのソーシャル・サポートの授受量が多い一方、自身が受け取っているよりも多くソーシャル・サポートを提供している(過少利得)と体験しやすく、②自己愛的脆弱性の傾向が強い状態ほど友人関係を苦痛に感じやすいという2つの知見が得られた。これらの結果から、自己愛的脆弱性が全般的に高い“脆弱群”や“中程度脆弱群”の人々は、友人間でのソーシャル・サポートの授受に関し“過少利得”状態にあるという不均衡感を抱きやすく、また友人関係では満足感よりも億劫さや苦痛などを感じやすい可能性が示された。自己愛的脆弱性が高いほどより多くの鏡映・理想・双子の“自己対象体験”を要するという神谷・高野(2013)の報告と本結果を併せると、自己愛的脆弱性が高い状態では自身が望むようには自己対象が応じてくれないといった不満や不全感とともに、他者への過度な期待や願望を抱きやすい可能性も考えられる。吉井(2007)は、過敏型自己愛傾向が強い青年は他者からの心理的支えやソーシャル・サポートを欲しながらも、その過敏さゆえの接近回避葛藤も強いことを指摘しているが、本研究でも友人関係において“脆弱群”や“中程度脆弱群”が抱える心理的苦痛や葛藤の強さが改めて確認された。

最後に本研究の限界と課題について、2点述べる。第1に、調査協力者の多くが適応的な生活を送っていると思われる学生であった点が挙げられる。本研究はアナログ研究としての意義はあったが、今後は神谷・岡本(2014)のようにたとえば本研究で抽出された“中程度脆弱群”や“脆弱群”に焦点化した質的研究を含めた更なる検討も有益であろう。第2に、友人以外のソーシャル・サポートネットワーク、たとえば親や恋人、教員などからのサポート授受や感情体験についてまでは論じることが難しい点が挙げられる。青年期には友人関係を中心としながらも、親や教員、恋人をはじめとした多様な対人関係が営まれており、今後は友人以外の親密な他者からのソーシャル・サポートの授受量との関連や感情体験についての検証も必要と思われる。

## 引用文献

- 福岡欣治(1997). 友人関係におけるソーシャル・サポートの入手と提供——認知レベルと実行レベルの両面からみた互恵性とその男女差について—— 対人行動学研究, 15, 1-12.
- Gabbard, G. O.(1994). *Psychodynamic psychiatry in clinical practice: The DSM-IV version*.



- Washington: American Psychiatric Press. ギャバード, G.O. 舘 哲朗 (監訳) (1997). 精神力動的精神医学——その臨床実践 [DSM-IV版] ——③臨床編: II軸障害 岩崎学術出版社
- 伊藤 亮・村瀬聡美・金井篤子 (2011). 過敏性自己愛傾向が現代青年のふれ合い恐怖心性に及ぼす影響について——自己愛的脆弱性尺度を用いた検討——, パーソナリティ研究, 19, 181-190.
- 岩崎真和・五十嵐透子 (2011). 大学生におけるsense of coherenceとアタッチメント・スタイルおよび知覚されたソーシャル・サポートの関連 教育実践学論集, 12, 71-81.
- 上地雄一郎・宮下一博 (編著) (2004). もろい青少年の心——自己愛の障害 発達臨床心理学的考察—— 北大路書房
- 上地雄一郎・宮下一博 (2005). コフォートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成 パーソナリティ研究, 14, 80-91.
- 上地雄一郎・宮下一博 (2009a). 自己愛的脆弱性尺度の妥当性の検討——友人関係への影響の検討を通して—— 岡山大学大学院教育学研究科研究集録, 140, 1-6.
- 上地雄一郎・宮下一博 (2009b). 対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性, 自己不一致, 自尊感情の関連性 パーソナリティ研究, 17, 280-291.
- 加藤 司 (2001). 対人ストレス過程の検証 教育心理学研究, 49, 295-304.
- Kohut, H. (1971). *The analysis of the self*. New York: International University Press. 水野信義・笠原嘉監 (監訳) (1994). 自己の分析 みすず書房
- Kohut, h. (1977). *The restoration of the self*. New York: International University Press. 本城秀次・笠原嘉監 (監訳) (1995). 自己の修復 みすず書房
- Kohut, H. (1984). *How does analysis cure ?* Chicago: University of Chicago Press. 本城秀次・笠原嘉監 (監訳) (1995). 自己の治癒 みすず書房
- 神谷真由美・岡本祐子 (2010). 青年期の自己愛的脆弱性に関する研究の動向と展望 広島大学大学院教育学研究科紀要, 59, 137-143.
- 神谷真由美・岡本祐子 (2012). 青年期の自己愛的脆弱性と心理社会的課題の達成感覚との関連 心理臨床学研究, 30, 571-576.
- 神谷真由美・岡本祐子 (2014). 青年期の自己愛的脆弱性と親との自己対象体験との関連 心理臨床学研究, 31, 881-892.
- 神谷真由美・岡本祐子・高野恵代 (2013). 大学生の自己愛的脆弱性による類型化と愛着スタイルの特徴 学校メンタルヘルズ, 16, 27-34.
- 神谷真由美・高野恵代 (2013). 大学生の心理的な支えと自己愛的脆弱性との関連——自己対象体験による検討—— 教職研究, 6, 11-19.
- 中嶋夕湖・岡本祐子 (2014). 自己愛的脆弱性, 自我脅威状況に対する認知的評価, 対処法略, ストレス反応との関連 広島大学心理学研究, 14, 99-127.
- 南雲香織・岩崎真和・五十嵐透子 (2018). 青年期の第二分離個体化と身体醜形懸念および大学適応感の関連 上越教育大学研究紀要, 37, 433-440.
- 目久保純一・百瀬ちどり・越中康治 (2017). 成人期以降の自己愛的脆弱性の発達の变化——高齢者と大学生の比較に基づく考察—— 梅花女子大学心理こども学部紀要, 7, 10-18.
- 小塩真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 43, 280-290.
- 小塩真司 (2004). 自己愛の青年心理学 ナカニシヤ出版
- 小塩真司・川崎直樹 (編著) (2011). 自己愛の心理学——概念・測定・パーソナリティ・対人関係—— 金子書房
- Raskin, R., & Terry, H. (1988). A principal-components analysis of the narcissistic personality inventory and further evidence of its construct validity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 890-902.
- 豊田瀬理乃 (2004). 対人関係上の信念の変化からみた友人関係の分析 平成15年度筑波大学人間学類卒業論文 (未公開)
- 吉井健治 (2007). 過敏型自己愛人格傾向の青年の事例——自己の傷つきの再体験への恐れ—— カウンセリング研究, 40, 306-315.

## Relationship between narcissistic vulnerability and social supports in adolescence

Masakazu Iwasaki, Toko Igarashi

This study examined the relationship between narcissistic vulnerability and social supports in adolescence. The participants of 446 students (ratio of valid responses 90.8% ; 206 males, 240 females) responded to the three questionnaires (narcissistic vulnerability, the amount of social support with friends, and the level of satisfaction with friends). Narcissistic vulnerability was divided into four groups based on the NVS-S (Kamiiji & Miyashita, 2009b). Results showed that “high narcissistic vulnerability group” significantly exhibits a higher score of social supports to friends than the other three groups, and “non-narcissistic vulnerability group” and “low covert sense of entitlement group” significantly exhibit a higher score of sense of satisfaction with friends than the other two groups. These results were useful research to clarify relationship between development of self-identity and social supports with friends.

**Key words:** narcissistic vulnerability, social support, friendship, adolescence